



創立152年

わにっこり

教育目標 わたしから考える子 にこにこ元気な子 つづけてがんばる子 こころを合わせる子

和邇小だより 令和8年 2月号

児童数376名 文責 澤村幸夫



太陽の光



2月3日は節分(季節を分ける)、その翌日が立春です。立春を迎えると、日が長くなり、太陽の光が少しずつ明るくなってきます。そんな陽射しを待っていたかのように、1年生が植えたチューリップが雪の中から芽を出してきました。冬の厳しい寒さに当てないと、植物は立派に成長しません。人間もまた、同じようなものだと思います。

日本では、太陽のことを「お日様」とか「お天道様」と呼びます。日の光に「お」や「様」をつけて太陽の光を大切にしてきました。「お日様」の恵みを受けた物も大切にしています。稲の実を「お米」、それを調理したものを「ご飯」と言います。「いただきます」や「ご馳走様でした」など、とても丁寧な表現の中に、自然の営みへの敬意を感じます。

健康スイッチ

人間は1日2時間以上、「お日様」の光を浴びると、自律神経が整い、元気でいられます。私も、毎朝、校門前であいさつをしながら、太陽の光を浴びることを心掛けています。目覚めのスイッチが入るからです。四季がある日本では、年間を通して日照時間が変わります。日照時間は、子どもの成長や活動に大きく影響します。

日照時間が徐々に延びるこの時期は、子どもの活動も活発になっていきます。反対に、10月や11月は、日照時間が短くなるので、活動も少なくなります。朝も暗く、起きにくくなります。朝日をたくさん浴びながら、歩いて登校すると、身体も頭も活動を始めます。朝日は「健康スイッチ」です。

朝、「お日様」の光を浴び「目覚めのスイッチ」が入ると、16時間後には、眠りのホルモン「メラトニン」が分泌されて眠くなります。部屋の明かりを消して真っ暗にすると、ぐっすり眠れます。ゲームやスマホ、テレビなど、明かりにあふれている部屋では、「メラトニン」の分泌が抑えられてしまいます。光をコントロールすることが必要な時代となってきました。睡眠は、生き物全般にわたり、極めて重要なものです。

集中と発散

授業では、45分間、椅子に座り、集中して話を聞いたり、文字を書いたりします。ずっと

集中し続けるというのは、難しいことです。そこで効果的なのが「外遊び」です。「発散」と「集中」は表裏一体だと思います。(夏場は「熱中症」の危険がありますが、)「外遊び」を通して太陽の光を浴び、上手に「発散」しながら、次の「集中」へと切り替えを行うことをお勧めします。



昼休みに中庭でなわとびをする子どもたち

自ら課題を見つける

社会に参画する

子ども県議会

教育のありようが、大きな転換期にきています。これまでの教育は、より多くの知識や技能を身に付けたり、与えられた課題を解決したり、指示されたことを、指示されたとおりにやり遂げたりすることが求められてきました。

しかしながら、これからの社会を逞しく、幸せに生きていくためには、この力だけでは不十分です。子どもたちに付けたい本当の力とは、「自ら課題を見つけ、周囲と協働しながら、課題解決に向けて動き出す力」です。AI が進化する時代では、「変化に対応する柔軟性や適応力」「新たなアイデアを生み出す創造力」「周囲と協働するコミュニケーション力」「デジタルや AI を使いこなすスキル」などが必要です。

そんな中、県の事業である「子ども県議会」の子ども議員として自ら応募し、約1年間活動している児童が、昨年に引き続き(昨年とは別に)本校にいます。6年生の山本夏愛さんです。県内小4から中3までの40名の子ども議員に選ばれ、2回の地域体験活動と6回の学習会に参加し、滋賀の未来のことを考えました。活動の集大成として、12月25日には滋賀県議会議場で、滋賀県をよりよくするための質問や子ども宣言の発表を行いました。このチャレンジ精神こそ、これからの時代に求められている「自ら課題を見つけ、周囲と協働しながら課題解決に向けて動き出す力」だと思います。山本夏愛さんを含む3名のチームが提案した内容を紹介します。

これからの学校生活をより良いものにするために

私たちは、滋賀県において「誰もが安心して学べる」新しい形の公立の通信制小中学校を設立することを提案します。

現在、滋賀県内には、さまざまな理由で学校に通うことが難しい子どもたちが多くいます。人間関係の悩み、心や体の不調など、理由は一人ひとり異なります。無理に登校を続けることは望ましくありませんが、一方で、子どもたちには社会に出たときに必要なコミュニケーション能力や学ぶ力を育む機会が必要です。

現在、不登校の子どもたちの受け皿としてフリースクールなどの民間施設がありますが、これらは文部科学省が定める教育課程(カリキュラム)に基づいた「学校」ではないため、出席や卒業として正式に認められない課題があります。その結果、子どもたちが「自分が学校に通っていない」という意識から自信を失ってしまうこともあります。

そこで私たちは、公立の「通信制小中学校」をつくることを提案します。

この学校では、オンラインによる学習と、定期的な対面の交流を組み合わせます。オンラインでは、一人ひとりのペースで基礎的な学力を身につけ、スクーリング(登校日)では先生と仲間と話す時間を設け、少しずつ他者と関わる力を育てていきます。

このように通信制であっても、「学び」と「つながり」を両立することが可能です。(中略)

現行の学校教育法を見ると、通信制の小中学校の規定はありませんが、この新しい仕組みが実現すれば、登校に悩む子どもたちにも“自分の居場所”と“学ぶ権利”が保障され、社会に一步踏み出すきっかけをより多く生み出せると思います。

滋賀県から全国へ、誰もが自分のペースで成長できる新しい教育のかたちを広げていくことができるのではないかと考えるのですが、いかがでしょうか。



第11弾 「本を読むこと」

このコーナーは、子育てと子どもの幸せをサポートする情報を提供するニューズレターです。子育てのヒントやこれからの時代に大切にしたい教育の話、健康で幸せな生活に役立つ情報を掲載したいと考えています。未来をたくましく生きる子どもたちにつけてほしい本当の力とはいったい何か、子どもが生涯にわたり幸せに生きていくには、周囲の大人はどんな関わりを大切にしていけば良いのかについて、共に考えていきたいと思ひます。

第11弾は、「本を読むこと」についてです。読書の大切さについては、これまでからも述べてきました。知識や教養を習得し、脳を活性化したり、ストレスを軽減したりします。語彙力・文章力・読解力が向上し、想像力や共感力が養われます。つまり、人生を豊かにし、仕事や学習の効率を高める上でたいへん重要です。そんなにすばらしい読書ですが、近年「読書離れ」が深刻化しています。和邇小学校では、少しでも子どもたちに本に親んでもらおうと、さまざまな取組をしています。朝読書の時間の確保、朝のお話会、昼のお話会、図書室の利用促進、和邇図書館の訪問、和邇図書館からの移動図書館（ミッケル号）、読書貯金、学級文庫などです。読書貯金の結果を見ると、実に多くの本を読んでいる児童がいます。きっと「豊かな生活を送っているのだろう」と、心強くなります。

では、どうすれば、子どもが読書を楽しみながら、理解力や思考力まで伸ばせるようになるのでしょうか。「子どもに読書をさせたい」と思っても、ただ「読め」と言うだけでは逆効果です。イヤイヤ読ませると、かえって本嫌いになってしまいます。ポイントは、子どもが一人で読むのではなく、親がそばで少し手助けすることです。例えば、年齢に合った絵本を読み聞かせながら、「この子、どんな気持ちだったと思う？」と声をかけてみる。難しそうな物語と一緒に読んで「ちょっと意味が分かりにくかったね。どういうことかな？」と一緒に考えてみる。こうしたやりとりが、子どもの読書活動をもう一段上に高める力を持っています。何より、親子のコミュニケーションが大事だということです。



学校のディスカス・ルビーインプラチナ
本文との関連はありません。



学校のディスカス・オリエンタルドリーム
本文との関連はありません。

人は、物事を考えるとき頭の中で言葉を使っています。そして、自分の考えを声に出して言う前に頭の中で言葉を使って整理しています。そんな過程で思考力が育っていくのです。読書後に感想を話し合ったり、「自分だったらどうする？」と問いかけたりすることは、この思考力を育てる絶好の機会になります。子どもの学びとは、誰かと一緒に考え、感じ、言葉を交わすなかで深まっていきます。だからこそ、学級で意見を出し合うことや、家庭内において親子の対話をするのが、非常に大きな意味を持つのです。

子どもには、放課後や土日の時間の使い方として、習い事や塾に追われるのではなく、自分で自分の時間をどう使うかを決めるゆとりを与え、「外遊び」を楽しんだり、好きな本を夢中で読んだり、親子で対話したりする環境を整えてみてはいかがでしょうか。

2026 わにっこギャラリー

期間	2月3日(火)～2月27日(金)
時間	9時30分～18時 *最終日は16時まで
場所	和邇平和堂2F わに平ギャラリー 都千本

和邇小学校の児童の作品を展示しています
どうぞお立ち寄りください